

---

# ETERNAL CHAOS ~ エイディアの少女編 ~

日下祈京

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ETERNAL CHAOS（エイディアの少女編）

### 【Nコード】

N6801A

### 【作者名】

日下祈京

### 【あらすじ】

遙か未来、ニューアースに住むエイディアと言う種族の少女、リスティアスは、単身でシャイロン平原の石の城に狩りに出かける。そこでリスティアスはその城のボス、タウロンに遭遇する。相手は手負いではあるものの、自分の実力では敵わないと思い、シャイロンキャンプへ帰還しようとするが…。

(前書き)

エイディアとは本来争いを好まぬ、温厚な種族である。

身長は低く薄い緑色の肌、顔の部分は白色。頭に2本の触角のよう  
なものが生えている。

また、背中に羽を携え、低空飛行しながら移動することが出来る。

主にリング状の武器を振る事によって召喚された生き物によって攻  
撃する。

他にも召喚石から生き物を召喚し、自分を守らせることも出来る。

エイディアの少女、リスティアスは今切実に悩んでいた。目の前には手負いのタウロン、左手には帰還装置。

自然同化をしている今、こちらから手を出さなければ向こうも攻撃はしてこないだろう。

相手はシャイロン平原で1、2を争うモンスター、タウロン。

まともに戦ったらどう足掻いても勝てない相手だが、今相手は手負いの状態である。

今のこの状態なら勝てるかもしれない。

倒せば大量の賞金が得られるであろう。

運がよければ高レベルの装備も得られるかもしれない。

しかし、腐ってもタウロン。

一撃でも食らってしまえば瀕死にまで陥るだろう。

「……、やっぱやめよう。うん、やめよう。」

そう言って帰還装置を使おうとした。

が。

がしゃん。

「あ」

立ちすくむリスティアス。

足元に転がる壊れた帰還装置。

リスティアスはうっかり帰還装置を落としてしまったのだ。

そして目の前には巨大な刺付きの棍棒を携え、こっちを睨んでいるタウロンが居た。

帰還装置を落した音で気づいてしまったらしい。

「え〜っとお……………」

頭のなかが真っ白になる。

コレからどうするか。

自分は死んでしまうのか。

そう言えば今日の朝御飯なんだったっけ？

いろいろなことが頭に浮かぶ。

ぐるぐる回って最後に辿り着いたのは。

逃げなきゃ。

その考えに至るまで、あまり時間は要さなかった。

「あ…っ」

が、振りかえった直後、ソレが不可能だと知る。

リスティアスでは到底飛び越せないような高い壁がそびえていた。

リスティアスはこの時初めてレポート覚えておけば良かったと後悔した。

悔した。

「戦うしかないか…って、うあっ！」

再びタウロンのいた方向を振り返って目に映ったのは、ちよつと前

ヒューマンの知り合いに聞いた『電柱』の

ような棍棒だった。（刺付き）

間一髪で避けていなければ重傷は免れなかっただろう。

リスティアスの立っていた位置の石畳は粉々に砕け散っていた。

「あはは…、す、凄い力だね…。」

その笑いは果てしなく乾いていた。

そしてリスティアスは懐から、さっき友人に貰ったばかりのジャイ

アント上級召喚石を取り出して、叫んだ。

「頼むよ…っ、アンタが死んじゃったらアタシも死んじゃうかもし

れないんだからね！」

リスティアスの目の前に一匹の大きな二足歩行の牛のようなモンス

ター、ジャイアントが現れる。

そして右手の宝石強化済キネスリングを振る。

タウロンの周りにキネスリングから召喚された緑色の生物が舞い、

ジャイアントがリスティアスを守りつつ、

攻撃する。

タウロンは慟哭の叫びを上げながら、棍棒を振りまわす。

数分後、タウロンは全身から血を流していた。

あと少しだ。

リスティアスはもう一度キネスリングを握り締めた。

と、リスティアスが勝利を確信した刹那、雄叫びにも似た悲痛な叫びが聞こえ、リスティアスは絶望した。

ジャイアントが死んでしまったのだ。

慌てて再びジャイアントを召喚しようと、召喚石を取り出した。

「あっ、しま……っ」

焦っていた為か、ついつい召喚石を落つことしてしまった。

そうしているうちに、血まみれになったタウロンの巨大な手がリスティアスを捉えた。

小さく、細い躰は簡単に捕まえられてしまった。

カラン、と言う音がしてキネスリングが地面に落ちた。

「やつ、ちよつと、放しなさいよ！このっ、バカ！マツチョ！ウドの大木！××××××（自主規制）！」

リスティアスはコレ以上ないほどの罵声を浴びせた。

しかし、タウロンは怯む様子もなく、逆に余裕の笑みを浮かべているようにも見えた。

ソレもそのはず、今のリスティアスの状態はまさしく『お人形サン』だった。

タウロンは握っている手を少し強く握った。

「痛っ……！」

リスティアスの表情が苦悶に歪む。

タウロンはソレを楽しむように何度も力をこめたりした。

「……んのっ、止めなさいよ！って言うか放しなさいよ！」

そしてリスティアスは掴んでいる親指に思いつきり噛みついた。

タウロンは短い叫びを上げ、ついリスティアスを掴んでいる手を緩めてしまった。

「やたっ！」

ここぞとばかりにリスティアスはタウロンの指をすり抜けて、腕の上を走った。

そして。

「おるあッ！」

非戦闘主義で知られるエイディアの女とは思えないような掛け声と共に放たれたジャンピンググローリングソバ

ツトがタウロンの右頬に突き刺さった。

ソレが決めてだったらしく、タウロンの躰はそのまま地面に倒れた。

「わ、わ、わ、…あきやつ！」

見事の蹴りを決めたりスティアスは、蹴りの反動でバランスを崩し、そのまま地面に落下して尻餅をついてし

まった。

「倒した……のかな？」

お尻をさすりながら恐る恐るタウロンの屍に近付いた。

タウロンは完全に息絶えていた。

「…や…、やったあゝっ！タウロン倒したあゝ！」

リスティアスはタウロンの周りをびよんぴよんと飛び回った。

雲一つ無い空に甲高い笑い声が響いた。

- 蛇足 -

タウロンを倒し、はしゃぎ疲れたリスティアスはハッと気が付いた。

「どっやっって帰ろう…」

リスティアスの足元には壊れた帰還装置とタウロンの屍だけが転がっていた。

冷たい風が走りぬけた。

(後書き)

お楽しみ頂けたでしょうか。

これはオンラインゲーム、エターナルカオスを基にした小説です。2年ほど前に書きました。このゲームは私をもっとも長くプレイしたオンラインゲームであり、半ば引退した今でも強い思い入れがあります。現在はパソコンのグラフィックボードの関係で画面表示バグがありあまりプレイしてませんが、気が向いたらまたプレイしたいと思っております。

なお、レスティアスは私のプレイするキャラクター名でなく、また実際にこのような名前のキャラクターが居たとしても一切関係ありません。レスティアスという名前は私が完全オリジナルの形でつけた名前です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6801a/>

---

ETERNAL CHAOS ~ エイディアの少女編 ~

2010年10月10日00時45分発行